

極北でのウミアック造り

Building a Umiaq in the Arctic Region

洲澤 育範

SUZAWA Ikunori

要旨

「ウミアック=Umiaq (写真1・写真奥のマストがある舟)」とは、極北地方の先住民・イヌイトやエスキモー⁽¹⁾が、木などで骨格を組み、外側をアゴヒゲアザラシやセイウチなどの海獣の革で覆って造る“デッキがなく、5人～20人ほど乗れる、大型の革張り舟”のことだ。

極北地方の伝統的な“革張り舟”について語るとき、主に取りあげられるのは「カヤック=Qayaq (写真1・写真手前のコックピットが2つある舟)」“デッキがあり、1人～5人乗れる小型の革張り舟”であり、ウミアックについては補足程度の解説が大部分である。しかしカヤックには“男舟”、ウミアックには“女舟”の意味合いをもつ地域もある。また、両舟が“男と女”“夫婦”のごとく存在することにより、彼

らの暮らしが成り立った地域もある。

解氷する初夏、ウミアックで家族・親族、犬、家財道具、カヤックなどを乗せて猟場を求めてキャンプ地へと旅をする。猟のときはカヤックで仕留めた獲物をウミアックで運んだり、それらから仕立てた毛皮などを交易品として運んだり、母船のような働きをはたす。あるいは鯨やセイウチ猟に“ハンティング・ボート”としてウミアックは用いられた。

資料として紹介する“*Comparative Eskimo Dictionary*” (写真2)の表紙の言語地図がウミアックとカヤックが存在した範囲をしめしており、極東ロシアのチュコト半島付近からベー



写真1 1951年 Cape Prince of Wales にて撮影。ベーリング海様式のウミアックとカヤック。夏場のキャンプ地移動の様子と思われる。写真提供・Edward Hailstone 出典・Anchorage Museum of History & Art. Library & Archives.

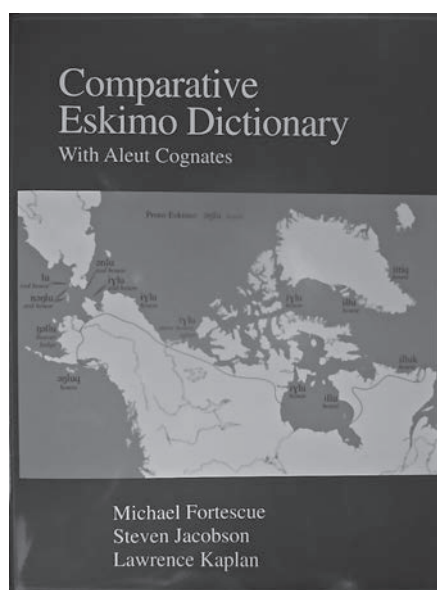


写真2 *Comparative Eskimo Dictionary*, Michael Fortescue, Alaska Native Language Center, 1994年

リング海峡、アラスカ、カナダ北部、グリーンランドにおよぶ。

2014年現在、ウミアックが使われる地域は極めて限られている。アラスカ北極圏のポイントホープやポイントバローでの、早春の解氷期に行われるクジラやアザラシの猟の時だけだ。十数年前までは、ベーリング海のセントローレンス島、ロシアのチュコト半島などで使われていた。2年に1回コッツビューで開かれる交易会には、チュコト半島から交易品を積んだウミアックが訪れていた。

21世紀になり、ウミアックは、かろうじて極北の暮らしのなかにその姿を留めているにすぎない。

さて、2011年、アラスカ北極圏のイヌピアック = Inupiaq の村・ヌールビク = Nuurvik に暮らす友人から、家族も増え大型の舟が欲しいのでウミアックを造りたい、と連絡があった。この村でウミアックを造るのは50~60年ぶりのことらしく、筆者は手伝いを依頼された(参考映像・ウミアックが使われなくなった当時のヌールビク近辺の様子。ウェブサイト *You Tube* より Friskvideos “Eskimo Villiage 1950’s” http://youtu.be/c_qvjqIG_xs 閲覧日:2014年9月8日)。

2012年厳冬の1月から2月、極夜の1ヵ月をイヌピアックの家族と生活を共にし、カリブーを食べ、麝香牛^{じゃこう}を食べ、唐檜^{とうひ}の皮をむきウミアックを造った。

極北の伝統的な舟造り技術の根幹は水にあった。水の惑星地球。この星には気体の水=水蒸気、液体の水、固体の水=氷が存在する。水の特質を存分に活かして木を割り、毛皮を仕立て、革^{なめ}を鞣す。

観測史上2番目の厳冬で気温が-50℃になる日もあり、思うように野外での作業ができなかったが、ウミアック造りの過程をここに報告する。

尚、研究者以外の方々に、広くご覧いただきたいので、写真やインターネット上の映像や情

報を多用した構成にしたことを付け加えておく。

本稿の構成は以下の通りである。

1. はじめに
 - 1) カヤックとウミアック・2種類の革張り舟
 - 2) ウミアックの分類
 - 3) 調査地 ヌールビクについて
 - 4) 調査協力者 Edward “Chip” & Agnes Hailstone
2. ウミアック制作のための材料
 - 1) 船体骨組み 木材 流木と立木
 - 2) 船体外殻 アゴヒゲアザラシとセイウチの革
 - 3) 結ぶ紐と縫う糸
3. ウミアック制作のための材料の加工
 - 1) アザラシ皮・革の加工
 - 2) ウミアックの骨組みを結び、外殻の革を張る、アザラシ紐の加工
 - 3) ウミアックの革を縫う糸=シニユーの加工
 - 4) 木材 唐檜の加工
4. ウミアック制作
 - 1) ウミアック骨組みの写真と図
 - 2) ウミアック制作方法
5. ウミアックを使った鯨猟の現場から～アラスカ・ポイントホープより～高沢進吾氏のレポート
 - 1) ウミアックについて 高沢進吾
 - 2) 高沢進吾氏と筆者の一問一答
6. 終わりに
 - 1) 舟の系譜について
 - 2) 博物館、資料館で撮影したウミアックに関する写真

キーワード：ウミアック、Umiaq、大型の革張り舟、女舟、狩猟用ウミアック、交易用ウミアック

1. はじめに

1) カヤックとウミアック・2種類の革張り舟

極北地方の先住民・イヌイトやエスキモーは、5,000年くらい前から、革張り舟を造っていたと推測されている（参照・Qayaq, David W. Zimmerly, University of Alaska Press, 1986年、参照・神奈川大学 国際常民文化研究機構 年報2「日本に収集されたカヤックとバーク・カヌー」洲澤育範・2011）。

(1) カヤック＝デッキのある小型の“革張り舟”（写真3）

- ・人の腰が納まる程度の乗り口＝ハッチがある。
- ・乗り口の数に1～3カ所。漕ぎ手は1～3人。
- ・カヤックの中に人が乗ることもあり、漕ぎ手+1、2人は乗れる。
- ・主に猟に用いられるが、交易で荷物運搬に用いられた地域もある。
- ・ダブルブレードパドル、シングルブレードパドルで漕ぐ。
- ・前を向いて漕ぐ。
- ・大部分は投げ足姿勢で漕ぐが、正座姿勢で漕ぐ地域もある。
- ・極めて稀に帆走させる地域もある。

(2) ウミアック＝デッキのない大型の“革張り舟”（写真4）

- ・漕ぎ手、乗り手を含めて5人から20人くらい乗れる。
- ・大型のウミアックは移動や交易に用いられるが、小型のウミアックは猟に用いられた。
- ・主にシングルブレードパドルで漕ぐが、オールで漕ぐ地域もある。
- ・パドルを使う時は前を向き、オールを使う時は後ろを向いて漕ぐ。
- ・腰掛けて漕ぐ。
- ・帆走させる。

以上、カヤックとウミアックの特徴を簡単に比較した（参照・Nanook of the North : A Story Of Life and Love In the Actual Arctic, R.J.Flaherty, 1992年カナダ東北部ケベックで撮影された、カナダ・イヌークの暮らしを記録した映像）。

2) ウミアックの分類

(1) 小型のウミアックと大型のウミアック

- ① 小型のウミアックはクジラやセイウチやアゴヒゲアザラシなどの狩猟に使われる。全長が5～6m前後で6～8人くらいで操船する。
- ② 大型のウミアックは交易や野営地の移動に使われる。全長は10m前後で20人前後は乗船できる。

(2) 船形のちがいがい

- ① 丸底。リブフレームを曲げて造る（丸底は



写真3 調査地域・コッツビュー湾域のカヤック。漕ぎ手の男性は、今回滞在した家族の夫人・Agunesの父・Joe Carter (Inupiaq)。1958年撮影。写真提供・Edward Hailstone



写真4 調査地域・コッツビュー湾域のウミアック。写真提供・Edward Hailstone 出典不明

機敏な操作性に優れている)。

② 平底。リブフレームを直木を繋ぎ合わせて造る(詳しくは造り方の項で解説する)。

(3) 言語から見た小型のウミアックと大型のウミアックの名称の違い

Aleut Dictionary Unangam Tunudgusii

Alaska Native Language Center 刊 283 ページによれば、

- ・nigila-x, igala-x とはウミアックのことである。ロシア人毛皮商人らはこれを baidar= バイダラと呼んだ。
- ・igala-x の項には
igilakucha-x = small baidar (with six seats for twelve persons)
igilasugaaya-x = big baidar (for 24 persons)

とある。

Comparative Eskimo Dictionary Alaska

Native Language Center 刊

こちらの辞書では boat で引くと

- ・36 ページ anyaq (angyaq) = open skin boat、また go hunting with boat とある。
- ・370 ページ umiaq = large skin-covered boat、また traditional women's boat とある。

代表的な辞書2点から取り上げたが、インターネット上には各民族が編集する辞書サイトもあり、表記もさまざま、付加する意味もさまざま

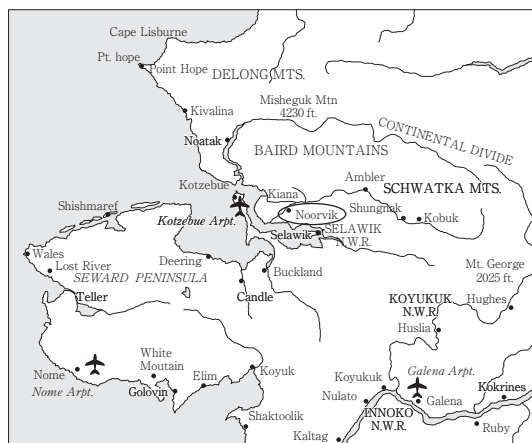


図1 調査地ヌールビク村近辺の地図

まなようだが、おおむね、小型のウミアックと大型のウミアックに分けた名称がある。

Alaska Native Language Center のウェブサイト *Alaskool Central* “Interactive Iñupiaq Dictionary” <http://www.alaskool.org/language/dictionaries/inupiaq/dictionary.htm> から、Aleut, Sugpiaq, Inupiaq, Central Yup'ik, Naukanski Yup'ik, Siberian Yup'ik, Sireniki の言語ページにアクセスできる(閲覧日: 2014年9月8日)。

3) 調査地ヌールビク⁽²⁾について = Nuurvik (イヌピアック⁽³⁾語 = Iñupiaq 表記 / Noorvik は英語表記)

アラスカ北西部、地図上でアクーティク・サークル・ラインを北へ越えたところにコッツビュー湾があり、先住民イヌピアックの街・コッツビュー = Kotzebue がある。その湾に流れ込むコブック⁽⁴⁾河 = Kobuk を、直線距離で約 70 km 遡ったところにヌールビクの村はある(図1、写真5)。

定期便の小型プロペラ機で約 20 分の飛行、また凍結したコブック川をスノーモービルで走れば約 2 ~ 3 時間で移動できる。

村ができたのは約 100 年まえである。火山爆発の影響で日照不足となり、カリブーの餌になるコケ・地衣類が生育せず、カリブーが激減し飢饉となり、食料不足を補うため、コブック河の恵みの川魚を求めて、今回、暮らしをともに



写真5 写真中央がヌールビクの集落。それを囲むように大河コブック河は流れる

した家族の先祖が、海岸の村から移住してきた。

簡単に現在の村の様子をお話ししよう。わずか400m四方の住宅地域に、冬場は650人ほど、夏場は狩猟キャンプに出かけるので500人ほどが暮らす、コブック河流域では人口が最大級の集落である。警察はいない。病院、学校、郵便局、消防団、イヌピアック自治の出先機関、クエーカーのフレンドチャーチ、ほか雑貨屋が2軒ある。観光客用の宿泊施設はない。

ここ10年ほどで飛行場も含め公共の施設の建て替えがすすみ、学校などは幼稚園児から高校生まで100人ほどの生徒がおり、スポーツジム、ゲストルーム、ランチルームが完備され、日本の中山間地域の古い学校より設備は整っている。

生活インフラも充実している。村全体の電力を供給する火力発電所があり、上下水道は完備され、気温-50℃でも水道は供給され、バキューム方式の水洗便所が凍結することはない。

筆者が1ヵ月ほど滞在した、ヌールビク村の平均的な家庭は、約20畳のリビング・キッチンに衛星放送が100チャンネル以上受信できるテレビ、パソコン、冷蔵庫、電子レンジ、3口コンロとオープン付きの電気コンロがある。セントラルヒーティングでいつでも温かいシャワーは浴びられ、室温は23℃くらい、半袖Tシャツ1枚で過ごせる。バス、トイレ、ランドリー、他に6畳ほどの部屋が3部屋ある。

庭にはスノーモービル、木製のソリ、四輪バギー、四輪駆動の車、それに船外機付きのボートがある。

冬場の日常は、冷蔵庫から冷凍食品（ピザやトルティーヤ）を取り出し、電子レンジで温め、ソファに座り、冷たいコーラのプルタブを開け、テレビのニュースで有名歌手の訃報を知り、それについて携帯電話のメールで知人とやりとりをする。ただし、磁気嵐が強いと全ての衛生通信は不通となる。

おそらく、われわれが想像している以上に快適な屋内生活環境がある。しかし、反面、暗く冷たい極夜の時期、狭い村での人間関係は緊密

になりすぎ、深刻な揉め事も起こる。

そのような生活環境のなかで、制作も維持管理も手間がかかり、温かな人間関係を必要とするウミアックを、暮らしの道具として使うために造るのは、極めて稀なことといえる。

4) 調査協力者

Edward “Chip” & Agnes Hailstone

チップとアグネスの一家 (写真6)

猟師・チップに出会ったのは2004年の夏、アラスカ北極圏をカヤックで旅した時だ。当時、彼らは子どもの教育のため海辺の村デーリングに住んでいたが、それ以前は季節毎にツンドラを移動し、キャンプ狩猟に重きをおき、彼らの伝統文化に倣う生活をしていた。

デーリングの村は人口120人、その内の7割は日系イヌピアックだ。チップは7人家族だが、チップ夫婦と小学校高学年の子どもたちに「ツンドラとデーリングの村とどちらが住みやすいか？」と聞いてみた。長男は15歳だったが、彼だけデーリングが良いと答えた。理由は女性がいるからだ。

他の家族は皆、ツンドラが良いと答えた。デーリングは人が多すぎるし、現金が無いと生活できない。ツンドラは生きることに必要な全ての物を私たちに与えてくれる……。

その後、様々な事情で、アグネスの実家があるヌールビクに居を移した。彼らの暮らしぶりは他のイヌピアックとは違い、伝統的な狩猟生



写真6 自宅前にて 左 Edward “Chip” Hailstone、右 Agnes “Qathapak” Hailstone

活を業の軸にしている。前述した通り一般的なイヌピアックの暮らしは“便利”である。自分たちが暮らしの中で使うために、わざわざウミアックなど造りはしないのだ。

チップたちの家には、冷蔵庫も電子レンジもテレビも四輪バイクも車もない。その代わりに、狩猟道具や銃は見事に充実している。

14歳の次女・イリは夕刻になると、まるでコンビニへ行くように、9歳の四女・キャロルを連れ、ライフルを担ぎ河原の柳林へ北極ウサギを獲りに行く。

夕食後、イリ（写真7）は父が撃ち母が捌いたカリブーの腱で縫い糸を撚る。

17歳の長女・ティグ（写真8）はその縫い糸でカリブーなどの毛皮で伝統的な衣装・パーキーを縫う。

キャロル（写真9）も筆者の滞在中にウサギ



写真7 次女14歳 Iriqtaq カリブーの背中筋を細く裂き、縫い糸を撚る



写真8 長女17歳 Tigmaiq 自分用のパーキー・上着を縫っている

狩りを覚え、毎日、夕刻に、彼女と気温-40℃のコブック河の河原を、ウサギを求めて歩いた。

このような暮らしぶりは、イヌピアックの村とはいえ、極めて稀な生き方“歴史実践”をする家族なのである。

極北地方の伝統的な革舟・ウミアックが廃れ、復興の兆しが見えない背景。また、それを飾り物ではなく道具として造ろうとする、家族の営みの背景を、理解いただけたらと思う（参考映像・Edward “Chip” & Agnes Hailstone 家族は、その貴重な暮らしぶりから、ナショナルジオグラフィック社が映像記録している。ウェブサイト *NATIONAL GEOGRAPHIC* “Life Below Zero: Seal Searching”

<http://channel.nationalgeographic.com/channel/life-below-zero/videos/seal-searching/>

“Life Below Zero: Carol’s Caribou”

<http://channel.nationalgeographic.com/channel/life-below-zero/videos/carols-caribou/>

“Life Below Zero: Waiting to Freeze”

<http://channel.nationalgeographic.com/channel/life-below-zero/videos/waiting-to-freeze/>

“Channel: Camp Tours: Noorvik”

<http://channel.nationalgeographic.com/channel/videos/camp-tours-noorvik/> 以上 閲覧日：2014

年9月8日)。



写真9 四女9歳 Carolyn Nuna Putrug 柳林の中に、ウサギ獲りの罠を仕掛けている

2. ウミアック制作ための材料

1) 船体骨組み 木材 流木と立木

主材は唐檜⁽⁵⁾ = スプルース

(1) 流木

極北の永久凍土に木は自生しない。しかし、そこには木を材とする舟がある。それは針葉樹林帯、温帯降雨林帯の木が流れ着くからだ。

大雨での山崩れ、あるいは洪水、また解氷期には氷が川辺を削り、木を倒す。それらが、川の流れにのり、海流にのり極北の永久凍土帯の沿岸へ流れ着く。時に欧州の難破船の船材も流れ着く。水に流され、たどり着いた木が、人の手で水の上を行く船に生まれ変わる(写真10,11)。

(参考映像・海流について。ウェブサイト NASA Visualization Explorer より “Perpetual Ocean” <http://svs.gsfc.nasa.gov/vis/a010000/a010800/a010841/> 閲覧日：2014年9月8日)。

アラスカ北極圏も、内陸に入ると夏場の気温は20℃を超える日がある。地形は永久凍土地帯と針葉樹林地帯が複雑にいきなり、森が点在する。大径の木は育たないが、直径10~20cm程度の唐檜 = スプルースはコブック河流域では安易に入手できる。

海岸線は気温も低く樹林帯はないが、川上の針葉樹林帯から漂着した木や、温帯降雨林帯から海流によって漂着した大径の木が入手できる(写真12~14)。

(2) 立木

針葉樹林帯の森から立木を伐採して使う。かつては、冬場はソリに乗せて運び、夏場は筏を組んで運んだ(写真15)。また、白人との接触後は交易の物品として木材は持ち込まれた。

現在では村々により状況は異なるが、居住区内およびその近辺での伐採は禁止されており(倒木の利用は可)、居住区より数マイル離れた森から伐採するようにと条例がある。

2) 船体外殻 アゴヒゲアザラシとセイウチの革

(1) アゴヒゲアザラシ(顎髭海豹/和名) = Bearded Seal (英名) = ugruk (Inupiaq 名)



写真10 6月のコッツビュー湾近辺の湖沼群。永久凍土



写真11 6月のコッツビュー湾沿岸。海岸には雪が残り、沖合には流氷が漂っている



写真12 6月のコブック河中流域。針葉樹林帯。唐檜の森



写真13 コッツビュー湾に流れ込むキワリック川の支流クオーツクリークの上流部。このように川岸の唐檜が川に倒れ込み、沿岸へ流れ着く



写真14 温帯降雨林からコッツビュー湾に流れ着いた大径の流木

北極海からベーリング海、オホーツク海まで分布し、アザラシ類の中では最大の体格で、成獣の体長は200~260 cm、体重は200~360 kg 前後である。流水とともに移動する。以前、首都圏の多摩川などに現れたアザラシの「タマちゃん」はアゴヒゲアザラシの幼体である。

・ アザラシの狩猟法

凍結期：薄氷に空けられた空気穴に、アザラシが呼吸するため顔を出すのを待ち、仕留める。

解氷期：流水上で昼寝をするアザラシや、氷の裂け目で呼吸するために顔を出すアザラシ、あるいはアザラシは好奇心が強く、人間を観察するために顔を出したアザラシを仕留める。

現在では凍結期も解氷期も、まず銃で止めを打ち、アザラシが海に沈む前にロープ付きの離頭もりの銚を打ち込み引き上げる。

写真16~19は、アゴヒゲアザラシおよびその猟の様子である。ポイントホープにて、日本



写真16 船上から銃でアザラシの頭部を狙う。揺れる船上から小さな頭部を打ち抜くには熟練の技術が要求される。撮影：高沢進吾氏

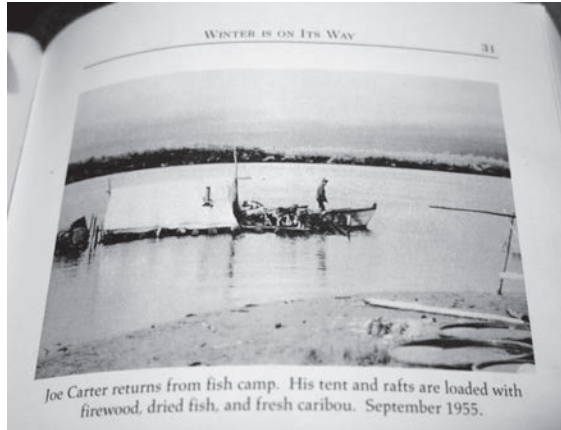


写真15 1995年撮影 コブック河を行き交う筏。男性は Agness の父・Joe Carter 氏。1995年撮影。写真提供・Edward Hailstone 出典・North to Alaska, Patricia May Miller、その他のデータは不明

人鯨猟師・高沢進吾氏が撮影した。

(2) セイウチ (海象/和名) = Walrus (英名)
= aiviq (Inupiaq 名) = ayveq (Yupik 名)
北極圏の海岸部に分布し、成獣の体長は270~360 cm、体重は500~1,200 kg 前後で、牙を持つ (写真20)。

大部分のウミアックはアゴヒゲアザラシの革で造られるが、ベーリング海のキング島やセントローレンス島ではセイウチの革を使う。

しかし、現在では、革を使うには多くの手間と費用がかかるので、バリステック・ナイロン布とウレタン塗装を使うのが主になっている (参考映像・1900年代初頭、カナダ北部のアザラシ猟の様子。ウェブサイト [vimeo](http://vimeo.com) より。ドキュメント・フィルム Archeoten “Nanook of the North”



写真17 仕留めたアザラシが海中に沈む前にロープ付きの離頭の銚を打ち込み、舟で牽引し、持ち帰る。撮影：高沢進吾氏



写真18 アゴヒゲアザラシ アザラシの中では最大級の大きさ。撮影：高沢進吾氏



写真19 解体の様子。撮影：高沢進吾氏

<http://vimeo.com/42775802> 閲覧日：2014年9月8日。24分頃にセイウチ猟の様子、58分頃にアザラシ猟の様子が見られる。

3) 結ぶ紐と縫う糸

(1) 骨組みを結ぶ紐、船体革を張る紐

アゴヒゲアザラシの革から切り出して平紐を作る。現在はナイロンロープを使うことが多い(写真21)。

(2) 船体布・革を縫う糸「シニュー」

カリブーの腱から撚り糸を作る(写真22)。現在は人口的に作られたナイロン製の腱状糸を撚り糸にして使うか、ダクロンなど縫い糸を使う。

以上4点の革、木、紐、糸がウミアックの主材である。

3. ウミアック制作のための材料の加工

気象観測史上2番目の極寒となり、滞在期間中の平均外気温は -40°C 前後となった。その酷寒、温度変化による水の変化、“液体の水”と“固体の水・氷”の物質的差異を利用して“木”と“皮・革”⁽⁶⁾の下処理加工を行うことが特筆すべき技術であった。

最初にアザラシ皮・革について記すが、現地に於いて、伝統的な事物の作り方を訊ねると、まず対象物を捕まえることだ、と答えがかえってくる。アザラシを捕獲することを抜きにしてウミアック造りは成り立たないので、その重要部分である狩猟の方法から順を追って、アザラシ皮・革の加工について解説する。



写真20 セイウチ Deering 近辺の海岸にて 海岸に漂着したメスのセイウチの死骸から牙を採取する Edward Hailston 氏。採取した牙は政府機関に登録され、妻の Agnes がその牙に細密画を描きイヌイト・アートの作品となる



写真21 アザラシの革紐「アレギラック」と呼ぶ、成長途中の小型のアゴヒゲアザラシの革で作った革紐。小型のアゴヒゲアザラシの方が革が薄く、紐は作りやすい。これは5年以上使っているもので、かなり傷んでいる。写真提供および解説：高沢進吾氏

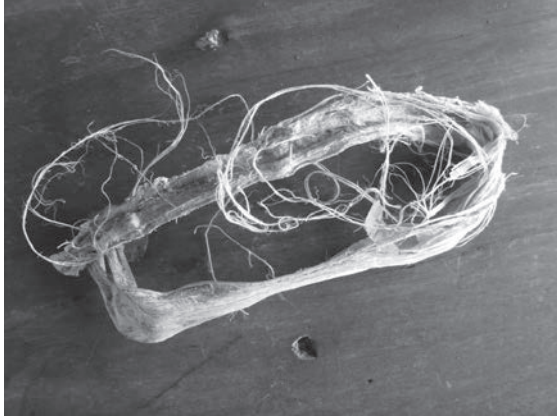


写真22 カリブーの背中に臃とそれを撚って作った糸「シニュー」

1) アザラシ皮・革の加工

参考資料 *Seal Hunting during the Spring*

season written by : Douglas Hailstone (Edward & Agnes Hailstone 夫妻の長男。以下 Doug) 写真23は、輪紋海豹 = ワモンアザラシ = Ringed Sealの猟、加工の過程を解説している。

永く暗く寒い冬を、家屋の中で、人間関係が極端に緊密化した時を過ごした彼らは、極夜が明け、陽が上り、はっきりと体感できるほど日増しに日照時間が伸び、狩猟が始まり、野外の暮らしが始まる春を心待ちにしている。遠い昔は、食料の残りを気にし、新鮮な肉に枯渴したことがあったと聞く。前述したが、今回、筆者が滞在したヌールビクの村は、1900年代初頭に火山爆発の影響で冷夏となり、カリブーが激減し飢饉となったので、沿岸部のイヌピアックがコブック河の恵みである川魚などの食料を求めて移住し開村した地である。

狩猟はただ単に食物を得る作業だけでなく、家族や小さな共同体の絆を深め、男・猟師の存在意義を確立する作業でもあった。現在のイヌピアックの集落では、絆意識の強い共同体での狩猟作業は、ポイントホープなどの鯨組にしか残っていないようだ。また家族内でも生活基盤を狩猟に置く家族は希で、猟師の存在価値や狩猟による絆の形成価値はそれほど高くない。狩猟はレクリエーションや恒例の行事のようになりつつある。

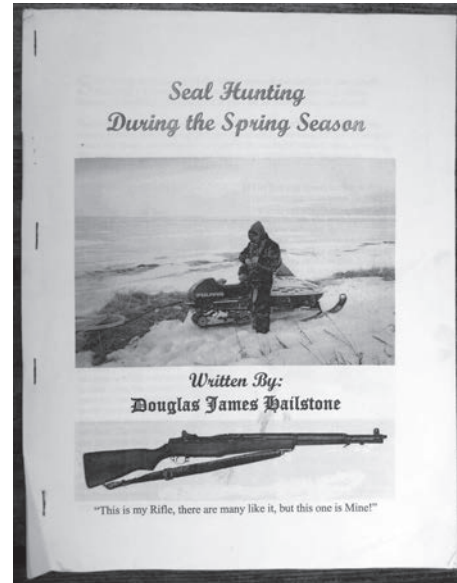


写真23 *Seal Hunting during the Spring season* written by: Douglas Hailstone

そのような世相を考慮すると、筆者が同居した Edward & Agnes Hailstone 家族との生活は、イヌピアックの伝統的な暮らしの底辺を流れる心情を歴史実践する場でもあった。

参考資料 *Seal Hunting during the Spring season* の中で、Doug は第一に狩猟がもたらす家族の共同作業が絆を深め幸せをもたらし、また自分が猟したアザラシが家族の食を支えることを誇りにしており、命がある限りそのように生きる、と述べている (Doug は 2014 年現在 25 歳で家庭を持っている。このレポートは彼が 10 代後半に書いた。ちなみに彼は 15 歳くらいまでツンドラで狩猟キャンプ生活をしており、初等・中等教育は両親が通信教育で施した)。

ウミアックは、そのような家族、小さな共同体の共存価値観の高さが具現化した母舟といえる。ゆえに、動力船の普及により、共存せずとも猟が行えるようになり、また猟をせずとも食料が入手できるようになるにつれ、極北から姿を消していった舟ともいえるだろう。

(1) 春期のアザラシの捕獲方法と皮と肉の処理

① 氷に空けられたアザラシの呼吸穴を見つける (写真24)。

アザラシは穏やかに降り注ぐ春の陽の下、氷

の上で何時間も昼寝をするために、自分の呼吸穴のそばに横たわる。真っ白の氷原の上には、取り散らかしたシミのようにアザラシの昼寝姿が点在する。

② 昼寝中のアザラシを発見したら、注意深く近づく

一見、無警戒に見えるアザラシに接近するのは難しい。不穏な気配を察知すると空気穴に飛び込み海中へ潜る。風下から注意深く接近するが、おおよそアザラシから 300~350m まで接近できれば良しとし、射撃の位置を確保する。

狙撃するとチャンスは一度だけだ。狙いは小さな頭か首である。頭を撃ち抜けば数秒で死ぬが、首は失血して死ぬまで 1~2 分かかる。狙撃後はアザラシが空気穴から海中に逃げ込む前に、1 秒でも早く走り寄らなくてはならない。

首尾よくアザラシを仕留めたら、必ず行わなくてはならない、短い儀式がある。新鮮な真水をアザラシの死骸に与え、自分のもとに食料として遣わされたことに尊敬と感謝の意を示す(写真 25)。

③ 住まいへ持ち帰ったアザラシの保管と家族との会話

ソリに積んでアザラシを持ち帰る。帰宅すると兄弟が進んでアザラシを運び、汚れた道具の手入れをしてくれる。

仕留めたアザラシは綺麗な雪の上に寝かされ体温を下げ、処理がしやすい状態になるまで 2、3 日そのまま寝かせる(写真 26)。アザラシの保管場所が確保できたら、父と 2 人でスノーモービルの点検をし、どのような小さな不調も見落としてはならない。それらの作業が終われば、狩猟の間に起こった一部始終を家族に話す。その時間が家族の絆を深めるのにとっても重要である。

Doug の文章を以下にそのまま転載する。

“My family listens carefully and with excitement, because I was taught everything I know by my family.

When I come home with something on my



写真24 氷原に空いたアザラシの呼吸穴。写真提供：Edward Hailstone



写真25 首を撃ち抜かれ失血死したアザラシ。写真提供：Edward Hailstone



写真26 雪の側で保管されるアザラシ。写真提供：Edward Hailstone

own, I can see that I've done something right and that they are proud of what they see. Success!

I guess you can say that hunting has made an impact on my family.

It helped create a bond that no one can break.

No matter what is going on in life, hunting is something we can always do or talk about.”

④ アザラシの処理 皮の剥ぎ方 その1

よく研いだナイフと清潔な作業場を確保する。アザラシは厚み5～8cmの皮下脂肪を持っているので、肉を傷つけないように注意深く作業を行う。

まず、腹部を顎から尾へむけまっすぐに切れ目を入れる（写真27）。われわれの方法では皮下脂肪を皮に付けて肉から剥ぎ取るのが最良とされている。

⑤ アザラシの処理 皮の剥ぎ方 その2

④で入れた切れ込みに、垂直に交わり左右の前足ヒレを直線で結ぶように切れ込みを入れる。特に注意深く、肉から血が溢れ出ないように作業する（写真28）。

次に両前足ヒレの回りに切れ込みを入れる。つまり足ヒレの皮は本体に残る（写真29）。

⑥ アザラシの処理 皮の剥ぎ方 その3

皮を皮下脂肪と一緒に肉から切り離す作業（写真30）。胸から頭部、そして胸から胃部、尾

へ向け順番通りに行う。特に頭部は撃ち傷があるので、できるかぎり血で皮下脂肪、皮が汚れないように丁寧に作業をしなくてはならない。もし血の汚れがあるなら、他の部位が汚れないように、常に汚れを取り除きながら清潔に作業を進める。清潔な作業をするためには、たびたびナイフを研ぎ、切れ味の鋭いナイフを使うことが大切である。

⑦ アザラシの処理 皮の剥ぎ方 その4

次は肩回りの皮と皮下脂肪を肉から切り離す。この作業は特に注意深く行わなくてはならない。血の流失を最小限に押さえることが、汚れの少ない皮と美味しい皮下脂肪を得ることになるからだ。作業は常に清潔に、血痕などは残さないように保ちながら、胃部から背中、尾ビレへと、皮と皮下脂肪を肉から切り離してゆく（写真31）。

この作業が尾ビレまで達したら、尾ビレ回りに皮下脂肪のついた皮を切り離す。つまり尾ビレの皮は身の方へ残す。



写真27 アザラシの腹部。顎下から尾までまっすぐに皮に切れ込みを入れた。写真提供：Edward Hailstone



写真28 アザラシに腹部と前足ヒレを結ぶ切れ込みを入れる。血は溢れ出ていない。写真提供：Edward Hailstone



写真29 分りにくいが見え左下に右前ヒレのツメが見える。写真提供：Edward Hailstone



写真30 胸部の皮下脂肪が肉から切り離されている。皮に切れ目を入れる時にはナイフを使い、肉から皮下脂肪を切り離す時はウル（女性用包丁）を使う。写真提供：Edward Hailstone

ここまでできたら、後は切り残しのあるところを注意深く身から皮下脂肪のついた皮を完全に切り離してしまう（写真32）。

⑧ 身から切り離された皮下脂肪つきの皮

Edward & Agnes Hailstone 家族は、あらゆる素材は何らかの役にたつ可能性を見出だすのがわれわれの務めだという。想像を具体化する能力と技術を身につけなくてはならない。

皮、革は長靴、パーカー、パンツ、アートワークや装飾に使う。腸は防水布として雨合羽のような上着に仕立てたり、浮き袋としたりする（写真33,34）。

次は皮下脂肪について血を丁寧に削ぎ落とす。この皮下脂肪からシール・オイルとマクタ

ックを作る。シール・オイルはわれわれが使う醤油のような食品である。凍らせてそぎ切りにした、魚や肉の切り身を醤油のようにシール・オイルをつけて食べる。マクタックはわれわれが知る、鯨の塩漬け前の塩皮、湯通しする前のオバイケと同じである。

身から皮下脂肪つきの皮を剥ぐ作業が雑だと、この皮下脂肪から血を削ぎ落とす作業に手間がかかり、まずいシール・オイルとカワウネになる。

また、あたりは血の臭いに誘われた鳥や犬がうろつくので注意しないとイケない（写真35）。

⑨ 皮から皮下脂肪を削ぎ落とす

皮から皮下脂肪を削ぎ落とす作業は時間と体力



写真31 写真中央より上が皮下脂肪のついた皮。下が身。Agnesの右手には女性用ナイフ・ウル。ちょうど背中あたりを切り離している。写真下右が頭部。写真下中央に右前足ヒレが見える。写真提供：Edward Hailstone

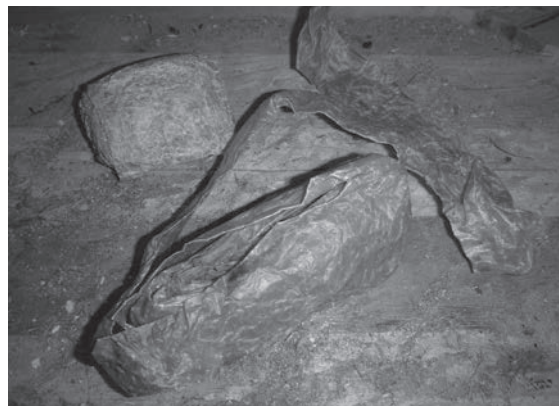


写真33 下処理されたアザラシの腸。これを縫い合わせて防水着を作る



写真32 下が頭。上が尾ヒレ。例えると、人が仰向けに寝てそのまま浴衣を脱いだようである。写真提供：Edward Hailstone



写真34 身から切り離された皮下脂肪つきの皮。Agnesの手元の皮は内側・皮下脂肪側を表にして、雪の上に置かれている。写真提供：Edward Hailstone



写真35 皮下脂肪についた血を丁寧に削ぎ落とす。皮は身の手元側が頭。写真提供：Edward Hailstone



写真36 固く平らな板に皮を置くと、皮下脂肪を削ぎ落とす作業を要領よくすすめられる。写真提供：Edward Hailstone



写真37 削ぎ落とした皮下脂肪は、写真中央下の器の中に集める。写真提供：Edward Hailstone

が必要だ。まず、女性用ナイフ・ウルをよく研ぎ、それから、皮下脂肪がついた皮を広げて置く平らな板を準備する。皮に穴を開けないように、注意深く、少しずつ削ぎ落とす(写真36~38)。

この作業は根気がいる。飽きることなく作業を続けるには、会話や唄が欠かせない。おしゃべりを楽しみ、唄を口ずさめば、単調な作業も苦にならない。単調な作業は人との会話を生み出す大切な時間でもある。

⑩ 生皮採取の仕上げ

皮に残ったわずかな皮下脂肪も丁寧に取り除く。その時、皮に穴が開いてないか調べながら作業し、穴があれば縫い合わせて塞ぐ(写真39、40)。

清潔に仕上がった皮は、汚れと、余分な油を取り除くために、熱いお湯に洗剤を入れ、その石鹼水に2、3時間ほど漬ける。

次に乾燥させ、伸縮を防ぐために干す。干す方法は地面に杵を打ち皮を張る方法と、木枠に張る方法がある。彼らは、皮が均等に張れる方法で、木枠に張る方法を好んでいる。

⑪ 肉の処理

1. 内臓を抜く 2. 前足ヒレと尾ビレを外す
3. 頭部を外す 4. アバラを外す 5. 背を開く 6. 背骨を外す、という手順で肉の処理を行う。この時の肉は干し肉にした(写真41)。

このレポートの最後に Doug は以下のように記している。

The End

This is dedicated to my grandfather Joe K. Carter to show thanks, respect, and my loyalty towards you.

I love you grandpa and thank you for everything you've done for me.

I wrote this piece for people to understand the working production from an Eskimo's perspective.

I hope that you enjoyed reading this and I hope to get another piece out someday soon in the future.



写真38 ほぼ皮下脂肪が削ぎ落とせた。写真提供：Edward Hailstone



写真39 皮に残ったわずかな皮下脂肪を根気よく、丁寧に、皮に穴を開けないように取り除く
写真提供：Edward Hailstone



写真40 皮下脂肪が取り除かれた皮。外側が表になっている。頭が右、尾が左。輪紋があるのが背中
写真提供：Edward Hailstone



写真41 分かりにくいですが、写真下左から皮、切り刻まれた肉、残骸となる。写真提供：Edward Hailstone

(2) アザラシ皮を革へ加工する

生皮を鞣して革とする。伝統的な鞣しの方法は“嚙む”“尿につける”などあるが、ここでは前述したように気温差を利用した鞣し・皮を柔らかくして革へ加工する方法と、毛皮から毛を処理して革にする方法を解説する。

① 皮を張り、乾燥させる (写真42)。

② 室内に入れ、水に漬けて皮に水を吸わせる (写真43)。室温は20℃、外気温は-40℃で、気温差は60℃ある。

この①②の工程を繰り返す。水は凍ると膨張して体積を増やす。その水の性質を利用して皮の細胞・繊維を破壊し、皮を柔らかくして革へと加工してゆく。

コッツビュー湾一帯に暮らすイヌピアックはイグルーには住まない。古くは半地下式の住居に、百数十年前には丸太小屋に暮らしていた。

当時から冬場は水と氷の性質を利用して皮を鞣して革にしていた。

③ 毛皮から革へ

①②の工程を経て柔らかく鞣された毛皮を、食用油に漬けて室内で醗酵させる。その臭いは魚の腐敗臭のようでもあり、あまり好まれる作業ではないようだ (写真44、45)。

このような工程を経て、ウミアックの外殻となる革は加工される。ここで紹介した輪紋アザラシはもっとも小型のアザラシで体長は120 cm 程度しかない。ウミアック制作に使われるアゴヒゲアザラシは、北極海に生息するアザラシでは体長は最大で250 cm 前後にもなる。またセイウチは体長が300 cm を超える。

小型のウミアックではアゴヒゲアザラシの革を7枚程度使い、大型のウミアックになると15枚以上は使うだろう。



写真42 左が皮の裏。右が皮の表、毛がある。皮全体に均一に張りがかかるように張る



写真43 輪紋アザラシの毛皮。3、4日かけてじっくり水を吸わせる

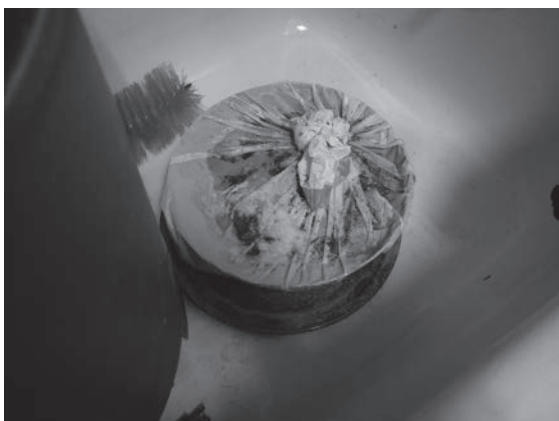


写真44 臭いがきついため幾重にも袋を被せ、密閉して油漬けされている



写真45 頃合いを見計らい、暖かい日に屋外で毛をむしる。右下の黒い散らかりが抜いた毛

2) ウミアックの骨組みを結び、外殻の革を張る、アザラシ紐の加工

前述の工程で加工した小型のアゴヒゲアザラシの革で紐を作る。ただし、前述の皮剥ぎは、人の着物を脱がせるように皮を剥いたが、ロープを作る皮は胸から腹部の皮を筒状のまま剥ぐ(写真46)。

写真46-1 撮影：高沢進吾を参照のこと。

3) ウミアックの革を縫う糸=シニューの加工

シニューの素材作りは、春・秋のカリブー猟のシーズンに行く(カリブーについての日本における解説はトナカイとされている)。コブック河流域のイヌピアックの人々は、自らをカリブー

ピープルと自称し、それほど衣食ともカリブーに支えられた暮らしをしていた(写真47~52)。

シニュー糸は油分を含み、水を弾く。また、湿気ると膨らみ縫い穴を塞ぐ。つまり防水を目的とする縫い糸として最適な素材である。

縫い糸としてシニュー糸を使う時は、撚り合わせて長い糸を作ることはない。概ね40cm程度の長さの糸を使う。理由はなんらかの事情で縫い目がほぐれた時、最小の長さでほぐれが止まるようにするためだ。

- ・ 女性用の半月状ナイフ=ウル=ulu=woman's
 - ・ semi-lunar knife について
- イヌイトの女性が使う、半月状の独特の形を



写真46 右・着物のように剥いだ皮から紐を切り出すと、その紐は縫れ捻れ、使いにくく強度の無い紐になる。左・筒状に剥いだ皮をその筒に添い螺旋を描くように切り出した紐は、縫れず、使いやすく強度の強い紐になる



写真46-1 ロープ製作用の場合は、胸から腹部の皮を筒状に剥ぎ取る。撮影：高沢進吾



写真47 コブック河を渡り季節移動をするカリブー。かつてはこの河渡りをするカリブーをカヤックで追い、狩猟していた。後方から肋骨の間のレバーを狙い銃で突き、失血死させる。写真提供：Edward Hailstone



写真48 80kg近いカリブー。夫婦2人で30分で解体する。この背中肉につく腱からシニューを作る



写真49 腱を乾燥させる。ご覧の通り腱の長さは70～80cm。乾燥すると縮むので繊維の長さは50cm前後になる



写真50 パリパリに乾燥した腱を揉みほぐし、細く割り、さらに揉みほぐして柔らかくする



写真51 細く裂いた繊維を口に含み湿気を与え、膝の上などで燃り合わせて糸にする



写真52 蓄えられたシニュー糸



写真53 Agnesの母、祖母が使ったウル。上・スレート、下・翡翠



写真54 Agnesの母が使ったウル。上・スレート、下・鉄



写真55 ウルを研ぐAgnes。包丁のように前後に押し引いたりして研ぐのではなく、手首を支点に刃先を振り子のように動かし、砥石の上を滑らせて研ぐ

したナイフ。包丁のように手前に引いたり奥に押したりして切るのではなく、刃先を前後に滑らせながら切る。ウルを持つ手首を支点に、刃先を振り子のように動かして使う。グリップが刃の真上にあり、手のひらにすっぽりと納まるので、凍った肉や魚を、上から押し切る場合に力が入る構造になっている（一部アサバスカンの女性も使う／写真53～55）。

4) 木材 唐檜の加工

(1) 材の収集と選択

夏場に、ヌールビク村周辺の森から唐檜を切り出し、持ち帰り、材を乾燥させる。緻密な加工はしないので、半乾きでも支障はないし、その方が割り出し製材や樹皮を剥く作業は簡単である（写真56、57）。

唐檜は直伸（直木）する樹種である。おおむね木目も直伸しているが、森の外側や風が強く当たるところに自生する唐檜は木目を捻りながら直伸する（ドリルの刃のように木目が走って



写真56 Edward Hailstone 氏と彼が夏場に切り出した唐檜の小径の丸太。これらの丸太から、長さ、直径、木目の走りを見て、ウミアックのどの部位に利用するかを判断する。この材を選択する作業に時間を費やす。木目が素直でたわむ材は柔軟性が必要な部位へ、木目が捻れ固い材は剛性が必要な部位へ、材の曲がりや反り具合によってウミアックの形状が合う部位へ、対称部へ使う材は重さや重心が同じような材を選ぶ。丸太の木目の詰まり方は日向と日陰では違い、芯を中心に重い方と軽い方がある。それらを見極め、木を読めることが大切な技術である

る)。そのような材は割り出し製材で加工するのが難しいので、丸太のまま利用できる部位へ使う。木目を捻りながら直伸した材の強度は強い（写真58）。

(2) 材の割り出し製材

直伸木目の唐檜の縦挽きは、鋸製材より割り出し製材の方が簡単である。特に外気温が -40°C 前後になると樹内の水分が凍結し、いとも簡単に丸太を半割できる。薪ストーブ用の大径の丸太も、酷寒の早朝には老人がパカンパカンとさしたる労もせず、割っている。

前述した、皮から革への鞣し技術と同様に、木材の製材も気温の変化により、水の変性・液体と固体を利用しておこなう。このような技術を目の当たりにし、実際に手を下し、身を持って知ることが、論考に深みと厚みを加えること



写真57 今回使う唐檜の平均直径は10cm程度である。写真の材は直径6cmほどで年輪は50年前後であった



写真58 コッツビュー湾沿いに建つ、古い丸太小屋の外壁。材は唐檜。木目が直伸している材と、捻れている材がある



写真59 (左) 外気温が -40°C 前後の日に割り出し製材する。径が細い丸太なので、地面に寝かせて幾つかのクサビを打ちながら、できるだけまっすぐに材を割り出す

写真60 (上) 所定の長さに切り、割り出された材。ウミアックの床材とリブ材になる。外気温が -50°C 近くまで下がり、あまりの寒さに野外での長時間の作業が出来ないので室内に運び入れた



写真61 手斧で外皮を落とす。手斧は Joe K. Carter 氏の形見



写真62 ナイフで薄皮を剥く



写真63 ひたすら樹皮を剥く。キールやガンネルになる長材

になると実感する（写真 59、60）。

（3）材の樹皮剥き

樹皮剥き材を加工するなかで最も手間のかかる作業だ。道具が手斧とナイフだけなので、ひたすら根気よく、短い日照時間の中で手際よく作業を進めなくてはならない。

唐檜は樹皮と木身のあいだに多くのヤニを持つ。このヤニがナイフや手斧の刃先に付くと切れ味が落ちるので、しばしば、刃先をこすり合わせヤニを取り除かなくてはならない。それが休息の時間のように、静と動、緩と急がほどよく入り交じる作業であり、労働歌の一つも口ずさみたくなる（写真 61～63）。

4. ウミアック制作

1) ウミアック骨組みの写真と図

ここでは、筆者が滞在したコッツビュー湾からコブック河流域様式の平底ウミアックについて解説する。

カヤックに比べると部材数も少なく、構造も簡素である（写真 64～66、図 2～4）。

構造が簡素だから補修も簡単であり、船体も軽い。軽さはこのウミアックの大きな特徴の一つである。氷原にソリを載せ解氷部まで移動し、鯨やアザラシが呼吸するために海面へ浮上したところを猟する。潮流れや風の影響でしばしば変わる解氷部から解氷部までの移動も容易である。

また極めて急峻な崖に囲まれた島（キング島、

ダイオミード諸島などの事例）でも、高台にわずかな平坦部分があれば、持ち運びが容易なので漁労やアザラシ猟の野営基地が設けられる。軽く、持ち運びが容易な舟は猟の自由度を高める。

これまでしばしば言われていた、極北地方は木が無いからこのような舟しかできなかった、と言う考えは、極北の現実にそぐわない。

2) ウミアック制作方法

（1）作業の大まかな流れ

① 骨組みを組む

- ・伝統的な手法はホゾ組と結びを主に、一部、木釘や骨釘などを使う。
- ・最近の手法は釘、木ネジなどで接合。一部結び。

② 船体布を縫い張る

- ・伝統的な手法も最近の手法も「縫う」と「張る」である。

ただし、伝統的な手法は、革の厚さや船体の部位により数種類の縫い方をした。なぜなら革には防水塗料など塗らないので、縫い目から水が侵入しないように縫わなくてはならないからである。

- ・最近革の代わりにパリストティック・ナイロン布を使い、防水塗料を塗るので、革を縫う縫い方ほど、複雑な縫い方はしない。

（参考映像・短い映像だが、ウミアックの革張りを解説している。ウェブサイト *You Tube* より *TouchAlaska "Inupiat Subsistence Whaling Arctic Alaska, Bowhead Whales, Eskimo Whaling"*



写真64,65 Edward Hailstone氏が2011年に制作したウミアック。ヌールビク村でのウミアック制作は50～60年ぶりだと言う。家族10人程度で狩猟キャンプの移動用に制作したが、長さが10mを越え、運搬に不便なので途中で制作をやめた。筆者が訪れた2012年にもう一回り小さいウミアックを完成させる予定だった。写真提供：Edward Hailstone

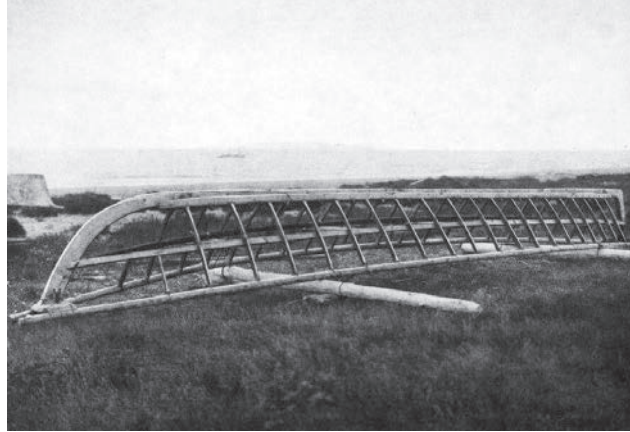


写真66 1950年前後の撮影と推測されるコッツビュー様式のウミアックの骨組み。写真提供：Edward Hailstone

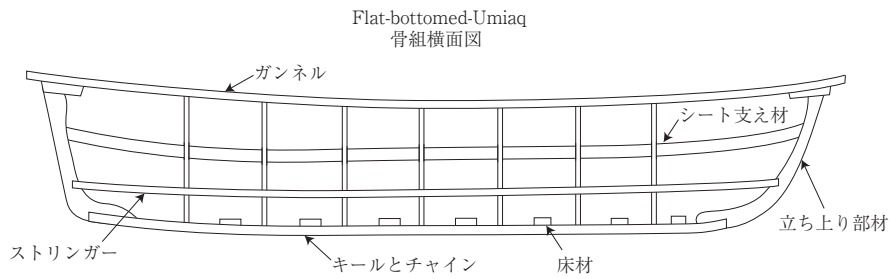


図2 骨組み全体の横断面図

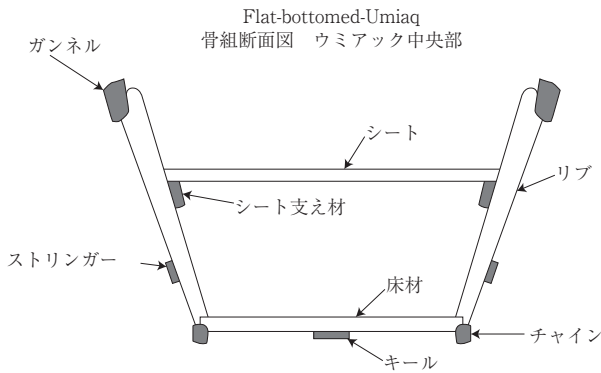


図3 ウミアック船体中央部の骨組み断面図

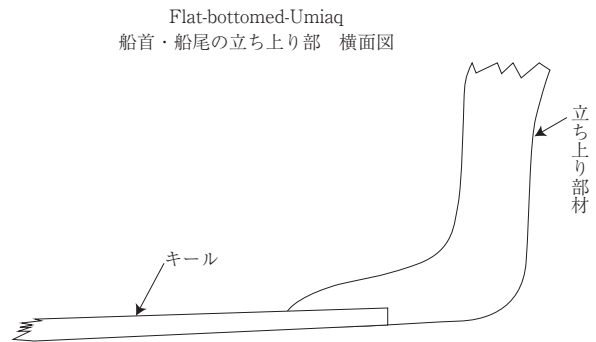


図4 船首・船尾の立ち上がり部の横断面図



図5 キールと船首、船尾の立ち上がり

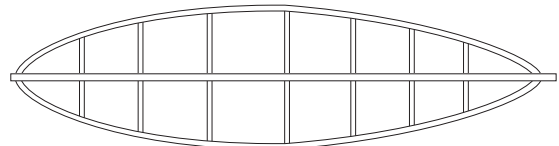


図6 図5に床材とチャイン材を組む

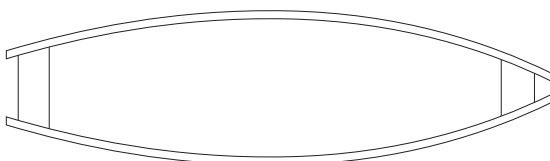


図7 ガンネルと船首、船尾の助材

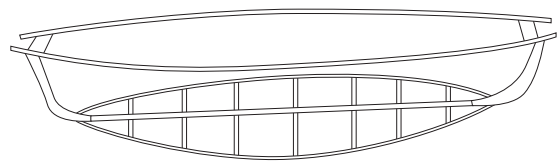


図8 図5、6、7を一体に組む

<http://youtu.be/0ho2fleU9Ts> 閲覧日：2014年9月8日。

(2) 骨組みを組む手順の図説

- ① キールと船首、船尾の立ち上がり部材を組み、横から見た図 (図5)。
- ② ①に床材とチェーン材を組み、真上から見た図 (図6)。
- ③ ガンネルと船首、船尾の助材を組み、真上から見た図 (図7)。
- ④ ガンネルと船首、船尾の助材を、それぞれ船首、船尾の立ち上がり部材に組み、斜め上から見た図 (図8)。
- ⑤ リブ、ストリンガー、座席などを組んで終了。図2参照。

上図の手順で作業を進めるが、詳細は以下のようなイラストを描き打ち合わせた (写真67~72)。

(3) 骨組みを組む具体的方法

作業は遅れに遅れ、骨組みの組上げまでできなかった。以下、要所要所を前年度に作成されたウミアックの写真を用いて解説する。今回、われわれが行おうとした手法で組上げてない部材もあるが、それは、未だにウミアックを製作しているところの方法に近い手法だと理解して頂きたい。

① 船首、船尾の立ち上がり部の加工

船首、船尾の湾曲した立ち上がり部材 (和名

ではミヨシに当たる部分) の名称はイスピアックの言葉で船首を Sivu = シブウ、船尾を Aku = アクと呼ぶ。本来、流木の木元から生えた根部を用いるが、今回は適当な流木を得られなかったので、耐水合板と接着材を使い制作した (写真73~76)。

② その他の部材の接合部

写真77~81参照。

③ 今回、2012年1月17日から2月12日までに出来た骨組み (写真82)。

筆者はひたすら唐檜の樹皮を手斧とナイフで剥きつづけた。しかし、如何せん予想以上の酷寒の日々がつづき、野外での作業が思うように進まなかった。作業をしながら聞くラジオニュースでは、インフラが整っていない極東ロシアの山間部では、酷寒のため死人がでていと報じていた。また、極端に寒さが厳しい日が続くと、人々は屋内で過ごすことが多くなり、人間関係や家族関係が緊密になり過ぎ、様々な摩擦が生じる。

とにかく、いろいろな不都合が生じて、自らが手を下し解決するしかない。スノーマシーンが壊れてはその修理に1日を費やす。ドリルビットが壊れては1泊2日でコッツビューまで買出しに行く。それが、アラスカ北極圏の酷寒の極夜にウミアックを造ることだと知った。

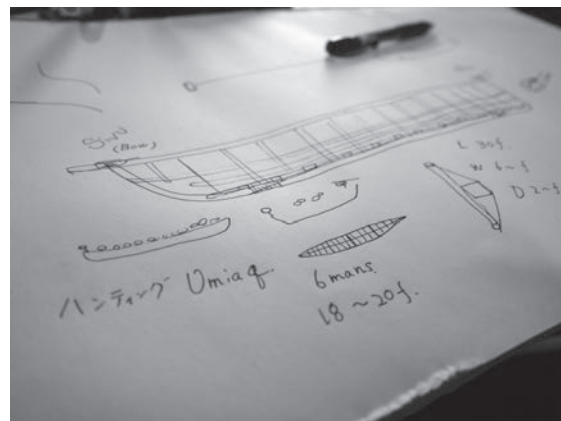


写真67,68 ウミアックの骨組み図を描きながら、その概略を説明する Edward Hailstone 氏。使う目的による分類は、狩猟用と交易・キャンプ地移動用。狩猟用は小型。交易・キャンプ地移動用は大型。リブフレームを直材を組み合わせて造る平底型。リブフレームを曲げ加工で造る丸底型。ウミアックは船形からこのように大別される

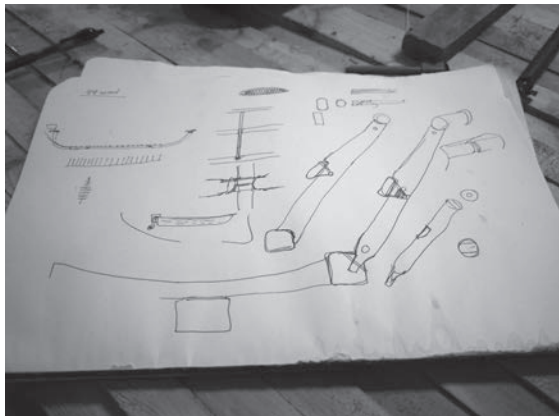


写真69 各部材（キール、床材、チェーン、リブ、ストリンガー、シート支え材、ガンネル）部材名称は図1～3参照）の、形状、ホゾの様子、組み合わせ、結びを解説している。前述したが、記録的な寒波で思うように野外での作業ができない。屋内での作業場を探すか、適当な場所が借りられず、筆者の滞在日数を考慮しながら、チェーンとリブをホゾで組んで結ぶか、ホゾを組まずに組み合わせて結ぶかを検討している

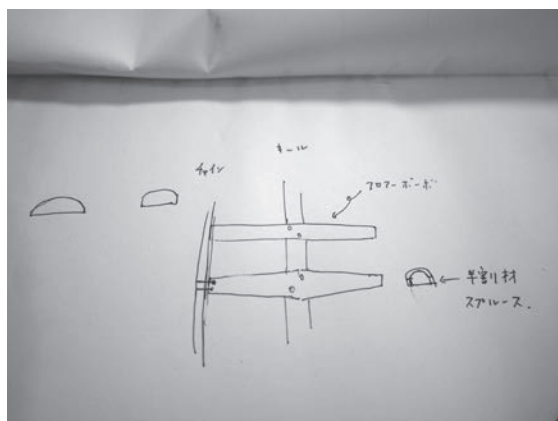
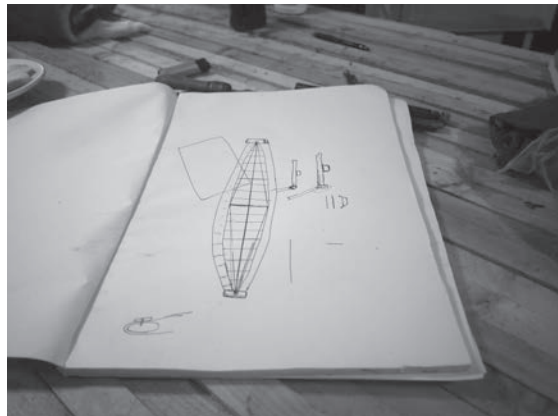


写真70、71 骨組み材の荒加工も目安がたち、床材の形状と、床材とリブ材の数を決めた。床材は作業時間が十分に取れないので、板材ではなく小径の丸太の半割り材を使うことにした

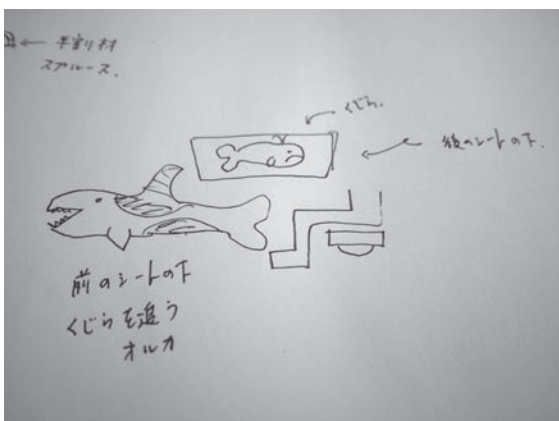


写真72 伝統的な狩猟用ウミアックの最前部のシート裏には、クジラが追えるようにとシャチの彫り物がある。最後部のシート裏にはクジラが大量であるようにとクジラの彫り物を施す。さて、われわれが造るウミアックのシート裏には何を彫ろうかと相談したが、滞在期間中にシートを作るまで至らなかった



写真73、74 耐水合板から部材を切り出し、材の厚みが足りないので、補助材をボンドで接着している



写真75、76 シブウ、アクとキールの接合部のスカーフ継ぎ加工。キールに接合されたシブウ



写真77 アクの形状とチェーン、キールの接合部



写真78 シブウのチェーン、キールの接合部。チェーンとシブウは釘で接合している



写真79 床材とチェーン、キールの接合部。チェーンと床材は接着剤と結びで接合されている



写真80 キールのスカーフ継ぎ。接着剤とボルトで固定されている。昨今造られるウミアックは、概ねこのような工法が用いられている



写真81 舟床全体



写真82 ノールビクの村を離れる前日・2月11日の日没前に、ようやく全ての部材が揃った

5. ウミアックを使った鯨猟の現場から ～アラスカ・ポイントホープより～ 高沢進吾氏のレポート

ここに、是非紹介したいレポートを掲載する。アラスカ・ポイントホープで行われる、伝統的なウミアックを使う先住民生存捕鯨の現場に、2000年から毎年春に通い続け、現地の鯨組の猟師として鯨猟に参加している日本人、高沢進吾氏がいる。

今年もこの拙稿を仕上げている2014年6月現在、高沢進吾氏はポイントホープで鯨猟に従事している。以下、鯨猟の合間に提供を受けた写真やレポートである。

1) ウミアックについて 高沢進吾

(1) ウミアックの制作、使用されている地域

2014年現在のセントローレンス島、キヴァリナ～バロー等、ベーリング海～チュクチ海沿岸で捕鯨を行っているアラスカの町では、ウミ



写真83 クジラ猟のキャンプにて。徹夜の猟では、ウミアックの中で昼寝をする人も



写真84 ウミアックでクジラを追う。奥にクジラの背中が見えている

アックを製作し「生存捕鯨」のために使用している（写真83～85）。

ただし近年は、海水が薄くなり、開水面が非常に広くなることも多く、手漕ぎのウミアックでクジラを追うことは難しくなり、モーターボート（通称はスピードボート）のみを使用することも多くなっている。

当地では、木製フレームにグラスファイバーやベニヤ板を張ったものもウミアックとして使用している人もいる。また、スキンボート用の化学繊維を張り、樹脂を塗った船体布を使用する人も増えて来ている。

ウミアックのフレームは、先代のキャプテンから受け継いで使用する場合も多いが、フレームが古くなり傷んでくると、新しいフレームを作り直す。また、新たにキャプテンになる人は新しいウミアックを作製している。

フレームを作る際、現在は市販の木材を使用していることが多いが、船首と船尾の駆け上がり部分だけは海岸に打ち上げられた流木の中から適当なカーブの木（根元付近の曲がった部分）を見つけて使用している場合がある。

フレームの結合は、^{ほぞ} 臍、金属製のジョイントやネジ、釘止めとロープによる結束を併用している。

船体には大型のアザラシ、ウグルック（アゴヒゲアザラシ）の皮を7枚ほど使用する。皮をフレームに張るためのロープはナイロンロープを使用していることが多いが、伝統的には小型のウグルック（アレギラック）の皮を用いて作ったロープを使用する。



写真85 クジラ祭りにて。2艘は皮を剥がれてしまっている。1番奥は皮、その手前はベニヤ板にグラスファイバーを張ったもの

※捕鯨対象はホッキョククジラ。猟期は4月下旬～6月上旬。バローなどでは、秋期（9月頃）にも猟が行われる。

（2）使用の目的

1960年代までは海、川が凍っていないければ通年に渡って移動用にウミアックを使用していた。現在ではアルミ製、グラスファイバー製のスピードボートが普及しているため、ウミアックはクジラの猟のためだけに使用されている。しかし（1）でも述べたように、クジラ猟ではスピードボートのみを使用することが多くなり、ウミアックはクジラ猟の「象徴」のような存在となっている。猟期中、すぐに海に出せる状態にして海岸に置いてあるが、一度も猟に使用しない場合もある。

（3）動力 漕ぐ、帆走、船外機

現在使用されているウミアックは8人乗り。非常用に「オール」も積んであるが、基本的には「パドル」を使用する。

帆走は行わないため、帆走を行うような装備は持っていない。船外機を付けられるよう、船尾に木製のラックを付けた物も多い。船外機は古くから使用されていたようで、1960年代の映像を見ると、既にウミアックに船外機を付けて使用していたことがわかる。

クジラを追う際も船外機は付けたままにしていることがあるが、船外機の騒音でクジラに気付かれてしまうため、基本的に手漕ぎでクジラを追う。船外機を使用するのは、クジラを見失って戻る場合や、クジラを曳航して戻って来る場合である。

（4）今後の行方

2010年以降、スピードボートとウミアック双方を猟場に持って行くことが多くなってきた。その場合、主に使用するのはスピードボートである。一部には、もうウミアックはいらないのではないか、という声もある。

アゴヒゲアザラシの皮を縫い、ウミアックに

張るまでの手間は非常に大きく、多くの人手がかかる。10年後、ウミアック自体は存在するものの、それは完全に猟の「象徴」となり、実際に使用されることもなくなり、次第に廃れていくのではないだろうか。

（5）現地の方のウミアックへの思い入れ

ポイントホープではクジラ猟のことを Umiaqtuq（ウミアクタク、ウマークタク）、クジラ猟のキャプテンのことを Umialiq（ウミアリック、ウマーリック）と呼ぶ。いずれも Umiaq から派生した言葉である。

ここ数年は、猟期中に数度しかウミアックを使っていないが、常に手入れは欠かさず、数年に1度は皮を張り直し、使用し続けている。明らかにスピードボートしか使わない状態であっても、猟期中はいつでもウミアックを使用できる状態にして、海岸に待機させている。そしてクジラ祭り（カグロック）の際には、ウミアックを中心に祭りが執り行われている。これらのことから分かるように、ポイントホープの人たちにとって、ウミアックはクジラ猟のキャプテンの象徴であり、非常に大切なものであると言えよう。

2）高沢進吾氏と筆者の一问一答

Q= 筆者 A= 高沢進吾

Q 高沢氏が所属するクジラ組の構成等について。
A 2014年5月、所属するクジラ組のキャプテン・Herbert “Popsy” Kinneveauk Jr.氏より聞き取り。

ウミアックはキャプテンの持ち物です。

ウミアックを作るのも管理するのもキャプテンの仕事ですが、キャプテンの長男がそれなりの年齢に達している場合は、キャプテンの代わりに、長男が管理、メンテナンス等を行っている場合が多いです。

我々のクジラ組の場合、キャプテンの息子が日常の見回り（海岸に置いてあるウミアックの確認）をしています。その息子の代理として、私が見回りに行く場合が多いです。

我がクジラ組は、クルー（構成員）はキャプテン夫妻の近い親戚（兄弟、従兄弟）が多いですが、変わったところだと、日本人（自分）、白人の教師（ポイントホープの学校の副校長、奥さんはエスキモー）もいます。

クルーは同じクジラ組に長く留まることが多いですが、中には年ごとに所属を変える人もいます。出るものは追わず、来るものは拒まずです。

我がクジラ組の場合「Boyer（ボイヤー）」と呼ぶ小～中学生の見習い数名と、食事の世話や肉の処理をする女性たち（クルーの奥さん、母親、ガールフレンドなど）を含め全員合わせて20名ほど、ポイントホープのクジラ組の中では大所帯の方です。このうち実際に猟に出ているのは7～8名ほどです。

Q 2014年のウミアックの様子は？

A 今年から新たに化繊製の船体布が使われるようになりました。今年皮を張り替えたウミアックのうち、数隻に布張りのものがあります。バリステック・ナイロン布にウレタン樹脂を塗ったものです。普通のグラスファイバーの船体のように固くならず、ある程度の弾力性は残っています。

今年、我がクジラ組のウミアックは、一度も海に浮かべることはなく、実際に猟に使用したのはスピードボート（モーターボート）のみです。他の組では手漕ぎのウミアックで猟に出るところもありましたが、やはりスピードでは敵わず、クジラを見つけて追いかけても、完全に遅れを取っていました。

ここ数年、どこのクジラ組も、儀礼的な意味でウミアックを準備しているような感じがあります。ほとんどのクジラ組がウミアックとスピードボートを準備し、猟にはスピードボートのみ使い、クジラ祭りの際に、猟の象徴としてウミアックを置いているような状態です。

・ 鯨猟の儀礼について高沢氏に質問したところ、氏のクジラ組のキャプテンは聖書をウミアックに積んでいるという答えから、以下の問い

をした。

Q 宗教は？

A この町の大半の人たちはエピスコパルチャーチ（米国聖公会）ですが、キャプテン夫妻は近年、教義が不満との事で、アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教会へ移動しました。どちらもプロテスタントですが、後者の方が原理主義的です。

Q ポイントホープに教会はいつ頃できたのか？

A 1860年代、捕鯨のための「西洋人」が町に大量に入って来たことにより、病気の蔓延、アルコールの影響などにより、人口が激減しています。

宣教師がやってきたのはその後の1890年代のようです。

（参考・ウェブサイト *Project Canterbury* より Hudson Stuck, D.D. Archdeacon of the Yukon, "The Alaskan Missions of the Episcopal Church A brief sketch, historical and descriptive" <http://anglicanhistory.org/usa/ak/stuck/02.html> 閲覧日：2014年9月8日）。

Q キャプテンの生立ちや社会的立場について

A キャプテンは1960年前後にポイントホープで生まれた50代。父親は白人ですが、祖父母に養子として引き取られ、エスキモーとして育てられています。若いうちに祖父母が他界したため、彼の姉夫婦が後の育ての親となっています。彼の育ってきた環境は、あまりに複雑すぎて、今もって家系のつながりはよくわかりません。

我がキャプテンに限らず、現在も片親が白人や黒人、という人は多いですが、エスキモーとしての誇りを持って生きている人たちも多いです。そしてキャプテンの場合もそうでしたが、30歳を過ぎてから、実の父親が誰だったのかようやく分かった、ということが時にあるようです。

彼はキャプテンであると同時に、Tikigaq corporation という会社のCEOでもあり、アラスカではそれなりに知名度、影響力のある人です。

Q コッツビュー湾の白イルカ猟では、スピードボートのエンジン音で白イルカが逃げるので、手漕ぎのカヤックやボートを使う猟師もいるが、ポイントホープではどうか？

A スピードボートによる猟では、恐らくスピードがものを言うのでしょう。浮き上がったクジラが潜る前に追いついて銚を打ち込むような感じです。

不思議な事に、いかにも銚を打ってくれ、と言わんばかりに、ボートが近づいても動かずに、のんびりと浮いているクジラがいます。

アゴヒゲアザラシ猟の場合、ある程度離れた場所を泳いでいるアゴヒゲアザラシを銃で撃ち、沈む前にボートで近寄って銚を打ち込むので、スピードボートが有利です。アゴヒゲアザラシやアザラシは、浮上してきて、目の前にいるボートを見て、慌てて潜る個体が多いので、もしかしたらエンジン音はあまり影響ないのかもしれないませんが、詳しいことは分かりません。

Q 2014年の雑感は何？

A 自分がクジラ猟に参加するようになった2000年以降、次第に気温は上昇し、氷は薄くなってきています。氷が薄くなるにつれ、開水面は一気に広がる様になり、手漕ぎでクジラを追う事は難しくなってきました。以前は開水面ができて、ある程度の狭さを維持していたので、手漕ぎでクジラを追っていました。

また、ここ数年、昔の生活を知る古い世代のキャプテンたちが相次いで引退、他界し、代替わりが進み、若いキャプテンたちは新しい技術をどんどん取り入れています。結果的に、伝統的なウミアックを作り出すものの、猟の象徴として作るのみで、実際の猟では使わないことが多くなりました。現に我々のクジラ組では、ウミアックはすぐに出せる状態にして海岸に置いてありますが、一度も水に浮かべていません。

スピードボートを使う事で、簡単に遠くまでクジラを追えるようになりました。しかし、ボ



写真86 右・高沢進吾氏

ートで追い始めると、今まで頻繁にキャンプの前面海域を行き来していたクジラの姿がぱたりと無くなります。音を聞きつけてキャンプ周辺は避けるのでしょうか。ボートがクジラを追って遠くまで行ってしまうと、再びキャンプ周辺にクジラが現れます。

スピードボートをメインに使うようになり、クジラは毎年確実に捕れるようにはなりませんが、何とも複雑な心境です。

[レポート著者]

・ 高沢 進吾 (タカザワ シンゴ)
1967年1月1日生まれ 群馬県出身
東海大学海洋学部卒業 (写真86)

アラスカ北極圏・コッツビューの小さな飛行機会社の時刻表に「Point Hope」という名前を見つけた。植村直己が書いた『北極圏1万2千キロ』にでてきたエスキモーの町だ。「ここへ行ってみよう」そう思った。偶然友達ができ、短い夏休みに毎年ポイントホープへ通うようになった。彼らの生活に対する興味は尽きず、2000年より、春のクジラの猟期にポイントホープを訪れるようになり、友人がキャプテンを務めるクジラ組のクルーの一員として手伝いを始めた。自然に対する様々な知識、刻々と変わり続ける文化。知りたい

ことは今も尽きず、友達も増え、結局はポイントホープに通いつけている。

6. 終わりに

1) 舟の系譜について

極北地方の伝統的な舟、カヤックやウミアック。あるいはその地域に接するバークカヌーなど、哺乳動物の骨格のような骨組みを持つ舟を製作し、漕ぎ、舟についての考察をその源流に向けて遡ると、二つの系譜が見えてくる。

- ・一つは水の上に浮く物。
- ・一つは、人が鳥に憧れ大空を飛びかうために生んだ飛行機のように、クジラやアザラシなどの海洋哺乳動物に憧れ、大海原を自由に行き交う物として、海洋哺乳動物を真似た物。

漠然とだが、その二つの系譜、特に後者の“海洋哺乳動物を真似た物”の源流を調査のなかに求めていた。そのような神話や言い伝えはないか、古老と話す機会があると訊ねていた。話によれば、「われわれの地にはそのような言い伝えはないが、われわれは西から来た。西の地にはそのような言い伝えが、残っているかもしれない」とのことだった。

目を西にむけると、東北シベリアのチュクチ半島に暮らすチュクチ民族の創世神話を題材とした文学書『クジラの消えた日』（リイトヘウ



写真87 『クジラの消えた日』ユーリー・リイトヘウ著 浅見昇吾訳 青山出版 1998年

／写真87) にめぐりあった。かいつまんで、物語の冒頭をここに記す。

はじめ、人と他の命の差異が不明瞭だった頃、チュクチには人は女しかいなかった。その女がクジラのオスに恋い焦がれ、結婚するためにクジラのオスは人の男となり陸へあがった。やがて夫婦は子を授かったが、子はクジラであった。子は海に帰り成長した。その子に会うためにクジラに似た舟を造った。

カヤックやウミアック、バークカヌーの素性と系譜が少しだけ見えてきた。

2) 博物館、資料館で撮影したウミアックに関する写真

写真88はコッツビューの市庁舎にて。写真89～94はコッツビューの病院 Maniilaq Health Centerにて。写真95はNorthwest Arctic Heritage Centerにて。写真96、97はコッツビューのSulanich Art Galleryにて。

謝辞

私を極北へ誘ってくれたEdward & Agnes Hailstone夫妻。彼らは自らの写真や資料、知識や経験を惜しみなく提供してくれた。

また、1ヵ月に渡り私を住まわせ食事まで提供してくれたJeff & Erica Gottschalf夫妻。

さらに私の経験の足りないところを補い情報と資料を提供してくれた、高沢進吾氏。合わせて



写真88 コッツビュー市庁舎に展示されているウミアックの模型



写真89 コツビュー在 Willie Goodwin 作



写真90 キバリナ在 Sylvester Swan 作

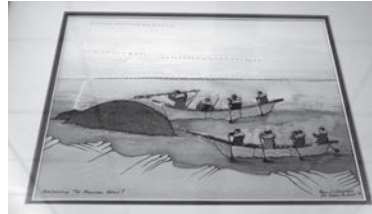


写真91～94 (右上、左上、右下、左下) ウミアックでのクジラ猟やクジラ祭り
の様子



写真95 コツビューの Northwest Arctic Heritage Center に展示されている
ウミアックの骨組み



写真96 コツビュー様式のウミアックの模型



写真97 クジラのヒゲに描かれたウミアック

Edward & Agnes Hailstone 夫妻の暮らしの技術
を、詳細に記録し、その資料を提供してくれたは
恒さくらさん。

そして四十数日に渡る調査中、博物館での便宜
をはかり、先住民の方々との出会いの場を設けて
くれ、疲れた私を私宅でゆっくりと休ませくれた
皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

註

(1) エスキモーと言う民族名について。日本ではエスキ
モーという呼称を差別用語としているが、筆者が
訪れたアラスカでは、先住民は自らをエスキモーと
呼ぶ。また公的用語としても使われているのでその
まま用いた。

短い滞在期間だが、約3ヶ月間、彼らと暮らした。
こちらが気をつかい「あなたはイヌピアック
(自称) ですか?」と訊ねると「そうだ、イヌピア
ック・エスキモーだ」と答えるのが一般的である。
エスキモーと言う民族名が呼称から自称へ近づいて
いるように見える。むしろアラスカでイヌイトと
言う呼称を聞いたことがない。

そもそもアラスカの先住民(インディアンを除く)
の自称はイヌピアック、ユピック、ウナンガン、チ
ュガチ、スグピアックなどだ。

イヌイトと言う呼称はカナダ北部の先住民が使
うことが多い。グリーンランドではカラリット、ア
マサリクなどと自称する。

なぜエスキモーという民族呼称が差別用語と言わ
れるのか? それは「エスキモー=生肉を食べる
人」という侮蔑的意味があるからだとされている。
しかし、その説も昨今いろいろと取り沙汰されてお
り、アラスカ・エスキモーと隣接するアサバスカ
ン・インディアンの言葉で「エスキモー=かんじき
の網を編む」の意を、カナダ東部のクリー・イン
ディアンが聞き違えて「生肉を食べる人」と流布した
などと言われている。

エスキモーと言う呼称を差別用語とし始めたの
は、1970年代のカナダ東北部からだ。これは多分に
保障問題などの政治的な配慮がされている。

合わせて、ここでは「インディアン」と表記し
た。これも差別的呼称であり「ネイティブ・アメリ
カン」と表記するのが好ましいとされているが、当
のアメリカ・インディアンはネイティブ・アメリ
カンという呼称を公式呼称とは認めずに異論を唱えて
いると聞く。

- (2) 名称の意味 ノールビク = Nuurvik 移り住む処
- (3) イヌピアック = Iñupiaq 自称・人
- (4) コブツク = Kobuk 大きな河
- (5) 唐檜 唐檜 = スプルース マツ科トウヒ属の常緑
針葉樹。木理はまっすぐ走り、材は軽く、柔らか

い。割り製材などの加工も容易にできる。われわれ
の暮らしの中では建具材やギターの表板などに多用
されている。スプルースの平均樹高は37mと大樹
に育つ樹種である。南西アラスカのシトカ地方では
樹高100mのシトカスプルースが存在すると報告さ
れている。一説では森の生態系の最終部に生育する
樹種で、スプルースの倒木はナースログと呼ばれ、
新たな森の再生の看護役でもある。

- (6) 皮と革 皮 = 動物から得た生皮。革 = 生皮を様々
な加工・鞣して腐らないように、柔らかくした物。
革は古くは「つくりかわ」と読んだ。

参考資料

和文

『ウグルック(アゴヒゲアザラシ)の腸の加工法』 是
恒さくら 報告書 2006年

『ポイントホープのクジラ猟』 高沢進吾 報告書
2013~2014年

『クジラの消えた日』 ユーリー・ルイトハウ 浅見昇
吾訳 青山出版 1998年

欧文他

The Skin Boats of Saint Lawrence Island, Alaska,
Stephen R. Braund, 1988

King Island Tales, Alaska Native Heritage Center &
University of Alaska Press, Alaska Native Heritage
Center & University of Alaska Press, 1988

Qayaqs and Canoes, Alaska Native Heritage Center,
Alaska Native Heritage Center, 2001

Qayaq, David W. Zimmerly, University of Alaska
Press, 1986

Seal Hunting Dering the Spring Season, Douglas
Hailstone, report

The bark canoes and skin boats of N.A., E.T. Adney,
Smithsonian Books, 1983

Skin boats of Greenland, H.C. Petersen, The National
Museum of Denmark & The Museum of Greenland
& The Viking Ship Museum in Roskilde, 1986

Aleut Dictionary, Knut Bergsland, Alaska Native
Language Center, 1994

Comparative Eskimo Dictionary, Michael Fortrescue,
Alaska Native Language Center, 1994

Umiak, Skip Snaih, Walrose & Hyde, 1997

参考映像

『アラスカ・ポイントホープのクジラ猟』 酷寒! 零下
40度アラスカの鯨狩り テレビ東京(東京12チャ
ンネル) 1976年

*Nanook of the North: A Story Of Life and Love In the
Actual Arctic,* R.J. Flaherty, 1992